

武田先生のこと

平 野 馨

武田宗久先生に初めてお会いしたのは、昭和30年であったと思う。それまで県立高校の教員をしていた私は、その年から県教育庁社会教育課で、後に初の県立博物館施設となる県立富津海洋資料館の設立準備の仕事に携わるようになった頃である。

先生は当時、県立千葉高校に勤めておられたが、加曽利貝塚の保存のことでしばしば社教課に来られたので、お話を伺う機会があった。その頃、考古学界で既に高名な先生であったが、私も県立高校の教員だったということで、いわば同業者意識から自然と親しみが湧いて話し合うことが多かった。先生がいろいろな話をしてくださると同時に、私の方も当時未だあまり知られていなかった民俗学のことなどを話した。先生がいわれたことは、「歴史の表面に出て来ない普通の人々の暮らし全般に係わる事がらや物（道具など）を対象としているといっても、幅が広過ぎてなかなか焦点が絞りにくいね。学問的な積み上げが難しそうだ。趣味的なものとか、学術的なものになりそうだね。」とのこと。いつもの微笑をたたえながらも、鋭い感覚を示された。これは今に至るまで誠に印象的である。

その私の方は、資料館も開館し軌道に乗ったので、また高校の教育現場に復帰した。

再び武田先生とお会いすることが多くなったのは、昭和38年度に千葉市文化財保護審議委員に就任してからであった。当時の審議会は、委員長の鈴木正夫氏をはじめとし、和田茂右衛門・土肥刀泉・国松真三郎・武田宗久・中村民男などの各氏、合計10人であった。武田先生は勿論、埋蔵文化財・考古資料を重点的に担当された。折から日本の経済が活況を呈していた時期の開発に連動して、埋蔵文化財の発掘が相つぎ、先生に関係する分野の案件が多く、当然、先生の発言すべき回数も多くなった。考古学者として案件を客観的分析し、保護の方向を打ち出す論議を展開された。この時の真剣な表情には、日頃の笑みはなかった。諄々と、時に訥々と所信を披瀝される先生の発言を、委員一同傾聴した。そして先生の内に秘めた情熱と緻密な説得力に納得したのであった。

その後、先生は委員長に就かれて、文化財の各分野を総括して目配りする立場になられ、公正な運営に努めておられたことがよくわかり、頭が下がった。

その間、個人的な思い出も多い。小さなこと、瞬時のことでも、意外に長く残るものがある。私が40年近く前に頼まれて、或る大学の研究誌に載せた論文〔君津市にある貞元親王伝説が、貞元（ジョウグエン）と貞観（ジョウグワン）の年号に係わりがあるのではないかということ、その当時の歴史状況や地元の伝承と結びつけた所論〕を読まれ興味を示してくださったこと、それから『加曽利貝塚博物館20年の歩み』に載せていただいた「カソリという地名」が先

生の眼にとまって、「民俗学って、話が自在に展開し、面白いことをいうものだね。」と、そこ
までまた一頻り歓談したものであった。いろいろのことが弾みとなって、何度かそうしたことが
あった。今となっては、ただただ懐かしく回想されるのである。

先生逝かれて1年、追慕の念はつづくる。万感をこめて、後生安楽を願い、御霊（みたま）安
かれとお祈り申し上げている。

（元 文化庁文化財保護委員会専門委員）
元 千葉経済大学教授